

Kishinkyō Letter

一般財団法人 機械振興協会 会報

CONTENTS

- 【TOPICS】BICライブラリに「くるまコレクション」誕生
～2023年11月1日公開開始～……………p1-3
- 【テナント紹介】一般社団法人 日本工作機械工業会……………p4

2023年秋号

No.13

TOPICS

BICライブラリに 「くるまコレクション」誕生

2023年
11月1日
公開開始

今年の夏、BICライブラリに新しいコレクションが加わりました。その名を「くるまコレクション」。今年3月をもって歴史を閉じた自動車図書館の蔵書です。

自動車図書館は港区芝大門の日本自動車会館

内にあり、自動車及び自動車産業にかかわる情報を収集提供していました。研究者、マスコミはもとより、一般の方にも利用されている図書館でした。同館はコロナ禍が拡大した2020年春より休館を続けていたのですが、昨年(2022年)、閉館が決定し、蔵書の受け入れ先を検討していたようですがなかなか条件にあう受け入れ先が見つからなかったようです。そのような中でBICライブラリに「蔵書を引き受けてくれないか」という打診がありました。BICライブラリは機械産業の専門図書館であり、自動車に関する資料は蔵書構成の大きな部分を占めています。自動車図書館の蔵書がBICライブラリの蔵書に加わっても違和感はありませんでした。なによりも自動車図書館の蔵書を一括して受け入れてくれる図書館が見つからず、貴重な蔵書が散逸することは避けたいことであると感じました。蔵書の散逸を避けること、これが自動車図書館の蔵書を受け入れるにあたっての最大のミッションであるといえます。

自動車図書館の蔵書の受贈を実現するためには、2つの問題を解決しなければなりませんでした。



くるまコレクション

BICライブラリに「くるまコレクション」誕生

～2023年11月1日公開開始～

まず一つは蔵書を収蔵するスペースを確保することです。旧自動車図書館の蔵書は雑誌も合わせると4万点ほど、そのほかに写真やカタログなどもあります。小規模な図書館とはいえ、1館の蔵書をほぼまるごとBICライブラリという既存の図書館に取り込むことになるわけです。そこでコロナ禍前にはライブラリ会員用会議室として利用していたディスカッションスペースをメインの収蔵スペースに充てることにしました。それでもこのスペースだけでは、到底受贈資料のすべてを収蔵することはできないので、地下書庫も大々的な整理を行ってスペースを作りました。蔵書を配架する棚やキャビネットは自動車図書館で使用していたものをそのまま譲り受けることになりました。

もう一つの問題は、BICライブラリと自動車図書館の書誌情報、つまり所蔵目録を統合する必要があります。4万点の資料ですから、正しい書誌情報と資料への紐づけがなければ、公開したあとに混乱することになります。BICライブラリと自動車図書館は幸いにも同じ図書館システムを採用していました。両者が違うシステムであったり、新しく目録を作成しなければならなかったら、作成と調整に時間がかかり、受贈することになっても、すぐに公開することは難しかったか

もしれません。

蔵書の受贈が決まってから約1年経った今年(2023年)8月上旬、蔵書と什器の搬入がはじまりました。3日間で、収蔵スペースを作り、1800箱あまりの段ボールが運び込まれました。BICライブラリの閲覧スペースには段ボール箱がぎっしり詰め込まれ

ました。積み上げられた1800箱の段ボール箱は壮観でした。翌日から開封して書架に並べる作業にとりかかり、その後蔵書点検を行います。しかし使用するレンタル機器の関係で蔵書点検を開始する日まで2週間足らずしかありません。それまでにこの膨大な書籍の配架を終えなければならないのでした。図書館スタッフはげんなりすると同時にあせった状態でした。ただその一方でどのような書籍が現れるのかちよっとわくわくする気持ちもありました。

あまりにも膨大な量の段ボール箱の山に、女性4名のスタッフでは、期日までに配架を終えることは難しいのではということで、急遽男子学生アルバイトに来てもらうことになりました。おかげで予想外のハイスピードで作業は進み、無事期日前に配架が終了しました。

蔵書点検を終えた8月末から10月末までに、書誌の調整(現物と目録を突き合わせて確認など)、書籍の修理、整備を行い、受贈された蔵書は「くるまコレクション」として11月1日より公開となります。

ここで「くるまコレクション」の中身についてお話ししたいと思います。自動車図書館の蔵書のほぼすべてが自動車に関するものです。書籍だけではなく、カタログや写真、新聞の切り抜きのスクラップブックなど多様です。そして、扱っている題材は自動車情報、たとえば名鑑のようなものから、モータースポーツや、ツーリングなど趣味の領域の書籍もあります。また交通法規や免許に関する書籍、自動車の価格に関する書籍、自動車の整備に関するものなど、自動車に関係するさまざまな領域の書籍がそろっています。雑誌については一部可能なものについては受け入れを継続しており、BICライブラリの雑誌コーナーに配架されています。

その中からいくつかご紹介しましょう。



閲覧スペースにあふれた段ボール箱

A



広告の本

広告関係の書籍 A B

自動車関係の広告にまつわる本です。「日本広告発達史」、「日本の雑誌広告」、「クルマの広告」など。珍しいものとしては、新聞の自動車関連の広告記事をまとめた「自動車・新聞広告縮刷版」。これはいわば自動車に関する新聞広告のスクラップブックです。

B

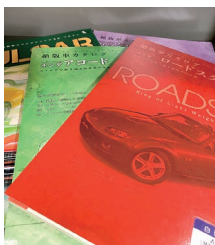


新聞掲載の広告
(自動車・新聞広告縮刷版より)

絶版自動車カタログ(グラフィス) C

メーカーが生産や販売を終了したモデルのムック本です。トヨタスプリンター、日産チェリー、ホンダアコード、マツダロードスターなど懐かしい名前が並んでいます。

C



絶版車カタログ

中尾文庫 D

長年にわたり自動車研究に携わってきた自動車文化研究所の中尾充夫氏より寄贈された850冊あまりの図書類で構成されています。戦後すぐから自動車に関するトピックを切り抜きスクラップにまとめ上げた資料が多数あります。その中には昭和40年代の電気自動車開発を論じた記事もあります。

D



昭和40年代の電気自動車に関する新聞記事
(中尾文庫のスクラップブックより)

自動車専門誌 E

BICライブラリでもこれまで自動車に関する雑誌は受け入れてきましたが、産業における自動車という視点の雑誌が主です。自動車図書館の受け入れていた雑誌の中には車に乗る人、車を買う人、車を好きな人に向けた自動車専門誌もあります。ここでは自動車のユーザー向けの雑誌をご紹介します。

E



オートバイからトラックまで〜自動車専門誌

● ベストカー (講談社ビーシー)

発行部数最多の自動車情報誌。主要記事は新旧の車情報で特に新車のスクープ記事が人気です。カー用品、自動車関連の漫画やアニメの情報まで「クルマ社会」にかかわる話題をとりあつかっています。

● Motor Magazine (モーターマガジン社)

自動車専門誌。欧州や国産のプレミアムカーを中心とした特集が柱になっています。表紙もスタイリッシュで写真も豊富です。

● 月刊自家用車 (内外出版社)

新車バイヤーズガイド誌。ニューモデルの比較試乗企画などの新車情報や、「新車値引き情報」などの購入時の実用情報などの企画が定評を得ています。

● Motor cyclist (八重洲出版)

モーターサイクルを趣味とする読者層に向けた総合二輪雑誌です。スクープや新車紹介、ロードテスト&試乗インプレッションなどのレポート記事を掲載しています。また、ツーリング情報、ライテク、バイク用品、旧車紹介などモーターサイクル関連の多様な情報が掲載されています。

● カミオン (芸文社)

「このような雑誌があるのか!」と驚きの、デコレーション・トラック、通称デコトラの専門誌です。車両の紹介だけでなくトラック業界の最新情報、運転手が所蔵する愛好会の情報のほか、デコトラを所有する会社の紹介や運送会社の仕事の密着取材などのコーナーもあります。カミオンはイタリア語で貨物自動車の意味だそうです。

以上はくるまコレクションのごく一部です。BICライブラリを訪れていただければさらに多くの貴重な書籍を手にとってごらんいただけます。

BICライブラリ

機械振興会館地下1階 開館は月一金、10:00-17:00

くるまコレクションはBICライブラリ内に設置。くるまコレクションの図書類は、貸出禁止(主に複写禁止の書籍)の指定がされている図書以外は貸出可能です。

一般社団法人 日本工作機械工業会



〔インタビュー〕 一般社団法人 日本工作機械工業会 総務部長 市村 修氏

日本工作機械工業会は、機械振興会館にある一般社団法人です。Kishinkyō Letter編集委員2名で総務部長の市村修氏にインタビューさせていただき、まとめてみました。

日本工作機械工業会(日工会)はどんな団体ですか。

日本工作機械工業会とは、工作機械産業の総合的な発展と関連工業の繁栄、日本経済の振興を目的に1951年(昭和26年)12月に創立し、その後、1978年(昭和53年)7月の社団法人への改組を経て、2012年(平成24年)4月に一般社団法人に移行しました。その間、工作機械業界の総合的な団体を目指し、2001年(平成13年)よりCAD/CAMなどのソフトウェア事業者、周辺装置メーカーにも門戸を開放するなど、新しい時代に対応した体制で事業活動を行っている団体です。

工作機械とはどんな機械ですか。

我々が日頃何気なく使用しているスマートフォンや時計、家電製品やデジタル機器から、大きいものでは自動車や航空機、船などの移動手段、更に、人口骨や人口関節などに至る様々な製品を構成する部品は、主として素材から削ったり、穴をあけたり(切削加工)して作られます。このような加工を行う機械が「工作機械」です。機械(製品)やそれらの部品は工作機械を通じて作られることから、工作機械を別名、「機械を作る機械」又は「マザーマシン(母なる機械)」とも言い、モノづくりを支えています。因みに、工作機械を大別すると、作業者がハンドルを回しながら操作する「汎用工作機械」と、コンピュータ等により数値制御で自動運転を行う「NC工作機械」に分かれますが、加工工程の効率化等から、現在は日本の工作機械生産の90%が「NC工作機械」です。

詳細な分類については当会ホームページをご参照ください。

工作機械産業の特徴について教えてください。

- ・工作機械は、自動車をはじめとする電機・精密機械、産業機械、医療用器具など、世界的に様々な産業で利用されているため、景気の影響を大きく受ける業界です。工作機械の受注は製造業の設備投資の動向に比例することから、景気の先行指標として用いられています。
- ・工作機械業界は、自動車などに比べて市場規模、企業規模も小さいのですが、高い国際競争力を保っており、中長期的には需要拡大が見込まれています。
- ・工作機械市場は主に3つに大別され、「高級機・高価格製品

の宇宙、航空機、医療機器」、「中級機・中価格製品の自動車、電機精密部品」、「低級機・低価格製品の一般部品」に分けられます。日本の工作機械メーカーは、高級機から中級機のボリュームが最も大きい層に位置しています。

- ・2018年から2020年にかけては、新型コロナの感染拡大の影響により、工作機械は大きく低迷しましたが、2021年に入り、コロナ禍の反動や人手不足を背景に省人化設備や自動化、半導体関連需要が高まっています。

工作機械業界の課題(対応)について教えてください。

製造業では、デジタル技術による労働力人口減少対応の自動化・省力化、脱炭素社会の実現に向けた対応、サプライチェーン分散化の課題が注視されていますが、工作機械業界においても同様に、いわゆるデジタル(DX)、グリーン(GX)、サプライチェーン再構築を課題とした取り組みが急務となっており、日工会では以下事業を推進しております。

一つ目のデジタルは、自動化生産システムを実現するため、機械・周辺装置の規模に応じた省小化・無人化の指針策定を進めています。

二つ目のグリーンは、カーボンニュートラルを目的に「工作機械のLCAガイドライン」や「工作機械産業の環境自主行動計画」フォローアップなどを通じて会員企業の省エネ活動を推進しています。

三つ目のサプライチェーンの再構築は、工作機械に特化したEPAマニュアル活用を通じて会員企業のレジリエンスを高めていきます。

他の課題は、業界の普遍的テーマである技術、経営、市場、人材、JIMTOF(展示会)等です。

これらの対応については、「工作機械産業ビジョン2030」で指摘された項目について検討を進めています。

なお、JIMTOFについては、来秋、工作機械業界の最大イベント「JIMTOF・Tokyo2024」(2024年11月5日～10日)を東京ビッグサイトで開催しますので、是非、ご来場いただき、最新鋭の工作機械に触れてみて下さい。詳細は、HPをご覧ください。

(<https://www.jimtof.org/jp/index.html>)

(2023年8月30日 聞き手:鶴岡、柴崎)

